



連載 河北潟の仲間たち



第17回 ミサゴ

ミサゴは、河北潟で魚を捕り周辺の丘陵で子育てをする猛禽類(タカの仲間)です。

河北潟湖沼研究所生物委員会では、継続的にこのミサゴの繁殖状況を調査しています。その調査結果の一部を発表した論文では、2003年に河北潟の周辺で抱卵が確認された巣は33巣あったことが示されています。また、雛の巣立ちまでが確認された巣の割合は70%前後でした(白井ほか、河北潟総合研究9巻)。こうしたミサゴのつがいの多くが、河北潟で餌をとっているものと思われれます。



河北潟からミサゴの巣までは、5kmから遠くて10kmも離れていますが、雌が卵を抱いている期間は巣の中にいる雌のために、雄が餌を運びます。雛が孵化し成長が著しくなる頃には、雄は河北潟と巣の間を何回も往復して餌を運びます。



河北潟の上を飛ぶミサゴは、魚を捕るために、上空をゆっくりと移動したりホバリングして水中の魚を探します。魚を見つけると急降下して、水中にダイビングします。うまく魚が捕れると一所懸命に羽ばたいて水から脱出しますが、そのときにはしっかりと魚を長い爪で掴んでいます。失敗するとただびしょ濡れになります。飛びながら体を震わせて水を切ります。ミサゴの腹面は白いのが特徴ですが、魚から目立たなくするためと言われています。



餌を運ぶときには左右の脚を前後に持って魚を縦に持ち、空気抵抗少なくして運びます。餌となる魚はこのとき空を飛ぶ魚になります。生涯、最初で最後の飛行です。

時々、餌の運搬中に魚を落とすミサゴもいるようで、能登島の知り合いの方は屋根にドスンという音がして外に出てみると、庭に鯛が落ちていて、空にミサゴが舞っていたという体験をしたそうです。

このようなミサゴの努力は、実は、流域の物質循環にたいへん貢献していると考えられます。河北潟の流域の土から流れ出した栄養分は、水に溶けて運ばれ、河北潟で植物プランクトンに取り込まれます。それを動物プランクトンが食べ、それを鮒が食べます。その鮒をミサゴが丘陵地に運び、雛が食べ糞をすることで、土地に栄養が戻ります。太古からミサゴはこうした大地の循環を担ってきました。鮭の産卵回帰などとともに、水域と陸域を結ぶ大切な河北潟のなかまです。

ところで、ミサゴの営巣木となるアカマツが、河北潟周辺の山林では衰退してきています。いわゆる松枯れの現象ですが、森林のメンテナンスも必要となっています。一方で最近では、鉄塔の頂部に営巣するミサゴが増えています。(文：高橋 久)